

学 位 論 文 要 旨

氏 名 本間 美里

題 目 対話による美術鑑賞活動における学習過程の記述分析に関する研究

1 研究の目的と方法

本研究は、小学校の図画工作科において、学年、人数構成、鑑賞の場所、介入のあり方など、対象や場を変化させた対話による美術鑑賞活動を構想実践し、活動の実践的關係と過程に応じた事例の記述分析を試みることで、子どもの学びの過程を明らかにすることを目的とした。

研究方法は以下の質的研究アプローチをとった。①学習過程の多様性と触発性に着目した活動構想と学習環境デザイン、②対話による美術鑑賞活動過程の周縁的参与の事例収集、③美術作品を媒介とした対話による活動過程に独自の契機である、知覚、語り、経験に着目した基本モデルの記述分析による析出と措定、④対話による美術鑑賞活動の形式を、一斉型、対面型の2つに分け、対面型に言語活動以外の表現活動を伴う形式を含めて、活動過程の記述分析を通して、基本モデルの改善と検証を進めた。対話による鑑賞活動過程の記述分析については、授業時間を基本的な記述分析の単位とし、全体を活動のもの、ひと、ことの実践的關係に応じた場面分けを行い、第1次トランスクリプト、第2次トランスクリプトに記述し考察を行った。事例の相互行為分析は、基本モデルに基づき、①子どもの鑑賞行為を自他間または作品間に生起する行為（語り・ふるまう）として捉える。②語りふるまうできごとが成立し、自他と作品間において〔＜経験－語り－知覚＞と＜作品＝テキスト＞〕が、相互作用的に更新されていく過程を詳細に記述した。本研究では、研究開発した授業実践より7つの実践を5つの事例として取り上げ、考察した。事例〔1〕では、対話による鑑賞活動における個の学びの過程の基本モデルを作成した。事例〔2〕では、こと、もの、自他による語りやふるまいによって触発される過程の記述分析と考察をした。事例〔3〕では、語りともをつくるふるまいをとまなう活動過程を記述分析し考察した。事例〔4〕では、3名の最小単位による接近した対面關係での活動過程を記述分析した。事例〔5〕では、美術館での鑑賞活動を3つの異なる作品の鑑賞過程をもちいて記述分析した。事例の記述分析は、現象学やエスノメソドロジーの手法に基づく画像を用いた相互行為分析を活動過程と実践關係に応じて実施し、鑑賞行為が作品を媒介にした対話を通して形成され、作品が現象していく過程が可視化されるよう試みた。

2 論文の概要

序章では、問題の所在と、研究の目的および方法と研究の経緯について述べた。

1章では、対話の中の美術鑑賞を意味生成な鑑賞活動と位置づけている。作品を見て経験したことから、生まれる語りを語り合うことは、経験や知覚を相互につくり変えながら作品を鑑賞する過程であり、一人一人の語りが生じられていく過程でもある。作品を見ることで対話が生じ、個々人の見え方、感じ方が変化していくこと対話のダイナミズムのもつ關係性に着目し、対話による美術鑑賞活動で起きている学びを位置づけた。

2章では、美術館と学校との鑑賞活動の場におけるありかたについて、先行研究から論点を整理した。

3章では、事例〔1〕を相互行為の視点から記述分析し、対話による美術鑑賞活動の学びの過程を示した。鑑賞活動により子どもたちの知覚と経験が発話や語りをとおして新たな世界として生成されていく過程を、意味生成的な学びの過程として示した。対話による美術鑑賞活動における個の学びの過程を、〔＜経験－語り－知覚＞と＜作品＝テキスト＞〕の基本モデルとして措定した。対話による鑑賞活動においては、一人が作品を見て行う語りにより、ともに見ている他者の経験や知覚がつくり変えられていく。つくり変えられた経験や知覚により他者の側の作品の見方が変わり、新たな経験を共起させていく。対話による鑑賞活動は作品の現象を生み出すだけでなく、子ども自身の見方や感じ方も現象（可視化）させ、相互に理解可能で利用可能なものとしていく。対話による鑑賞活動では、作品を見て語ることをとおして、作

と子どものどちらも現象させ、テキスト化することを示した。事例〔2〕では、グループ形式での対面的関係での鑑賞学習の活動場面を記述分析することで、対話による学習方法のもつ学習過程の触発性について示した。一斉型とは異なり、差異による新たな知覚・語り・経験の触発は、ファシリテーターの媒介を経ることなく、直接個人の知覚・語り・経験のいずれかに結びつくことを示した。事例〔3〕では、ものを用いた「表現行為」をともなう鑑賞活動を行い、他者と協働で行う表現行為の過程で生成変化する表現された形を媒介とした相互行為の分析をとおして、個々の子どもの経験・語り・知覚がつくり出されていく過程を明らかにした。事例〔4〕では、絵画作品の複製を用いて3名の最小単位グループで、ワールド・カフェ方式により鑑賞者を変えて行う活動過程を記述分析した。絵に描かれているものやその部分を他者へ指し示したり、作品を手を取ったり、回して向きを変えたりして互いに鑑賞することが可能な鑑賞形式のため、絵に描かれたものやものどうしの関係へ、他者の視線を向けて共同注視するふるまいが可能となった。つまり、作品を媒介にしながら、互いの経験・語り・知覚を繋いで、互いの中に協働の世界をつくりだしたり、受動的な経験を生み出したりするひとつひとつの連鎖が個人を超えて触発性を発揮し、作品をテキスト化していく対話による鑑賞活動のダイナミズムが明らかになった。事例〔5〕では、第3学年及び5学年で学級担任をし、〔1〕から〔4〕までの多様な形式の対話による鑑賞活動を教室で経験してきた子どもたちと美術館で実施した鑑賞活動を記述分析した。美術館での鑑賞活動では、作品を構成するものとの関係へ向かう身体的志向性と、テキストとしての作品の経験から触発される語りやふるまい（視線、姿勢、指差し等）が、個々人において＜経験－語り/ふるまい－知覚＞を連鎖して生成していた。その生成過程は、他者の行為へその場で相互に越境した連鎖を生成し、＜経験－語り/ふるまい－知覚＞の協働（相互）的生成を可能としていた。＜経験－語り/ふるまい－知覚＞の連鎖は、「もの」としての作品や概念としての作品を、行為や活動の次元において＜テキスト＝作品＞化して、知覚的意味を現象することと相互の関係にある。美術館での鑑賞活動では、作品に対する自身の経験を語り合い、作家の制作行為の過程を追経験して絵を現象させるふるまいや、作品や作家の世界観を互いの＜経験－語り/ふるまい－知覚＞を通して自分たちの実践的世界に引き寄せて語る行為がより可能となっていた。美術館という空間で本物の作品を鑑賞することの意味が実践学的に明らかとなった。

4章では、本研究の成果を基に、①対話的な学習過程に着目した学習活動の研究開発と、その活動事例の記述分析によるモデル化を機軸とした教育実践の臨床的研究の意義について考察し、〔＜経験－語り/ふるまい－知覚＞ \times ＜作品＝テキスト＞〕の「鑑賞授業における個の学びの過程のモデル」を示した。②作品への実践的関与をとおした芸術経験と文化的知覚の協働形成について考察した。言語活動や相互行為をともなった芸術経験の対話的過程は、芸術経験の過程と関係を自他が相互に捉え、協働して形成することが可能となる。また、芸術作品を見る経験や作品への実践的関与のあり方が、相互に観察可能、実践可能、理解可能となる。こうした自他の経験、語り、知覚が交錯することによる作品の現象をとおして、相互の見方や感じ方が変容する。その変容の協働的な創造と、その過程と成果が作品の現象として相互に経験可能であることは、学習活動としての対話による芸術経験の意義と可能性を示すものである。

終章では、小学校の図画工作科における対話による美術鑑賞活動は、対話を通じた芸術経験と文化的知覚を作品との間に他者との間に、相互作用的・協働的に形成する学習であること。対話による鑑賞活動は、他者の見方や感じ方やふるまい方をとおして生成する作品の現象を享受すると同時に、他者の見方、感じ方、ふるまい方も、自分のそれらとの差異と同一の関係において、作品の経験や現象の一部として理解する独自の共感形成のあり方である。社会的で文化的で歴史的な構成物である作品について、その内容や方法を体系的に理解するのではない、芸術経験に特有な新しい学習の形式を示している。

今後の課題は、鑑賞活動の分析の観点とした「経験・語り/ふるまい・知覚」の関係性から、本論文では記述分析を行わなかったアートカードによる鑑賞活動の記述分析を試み、モデルの実践的構造をより明確にすることである。また、着目児における上記モデルの「経験・語り/ふるまい・知覚」の微視的な連鎖過程が、学期や学年を経て変容していく過程を記述分析することで、子どもの資質や能力を形成する学習活動として「対話による鑑賞」の意味をさらに明らかにすることである。